

# BOOK REVIEW

## 《書評》

### 「スンクスの生物学」

【監修】磯村源蔵 【編集】織田銃一，東家一雄，宮木孝昌

松木 則夫（東京大学大学院薬学系研究科薬品作用学教室）

スンクス (*Suncus murinus*) は日本で開発されたトガリネズミ科の実験動物で、ラットやマウスなどの汎用されている小型実験動物とは異なり、齧歯目ではなく食虫目に属する。ジャコウネズミという別名があるが、“ネズミ”とつくると齧歯目に間違えられる可能性があるため、実験動物名は「スンクス」である。食虫目は胎性哺乳動物の中で最も古くから地球上に棲息し、哺乳類の原型を保持していると考えられている。1985年に「スンクス—実験動物としての食虫目トガリネズミ科動物の生物学」が学会出版センターから刊行されているが、その続編というよりも、その後の新たな知見を含めスンクスの研究成果の網羅を目指した成書となっている。実験動物化の経緯、飼養管理方法、あらゆる臓器に亘る解剖・組織学的な知見、免疫・遺伝・受精・病態などスンクスの諸特性など、スンクスの研究に携わってきた多くの研究者によって詳細に記載されている。直腸脱出の習性など、誰もがスンクスを飼育・観察していて驚く事象の解説もなされている。何よりも、スンクスを用いた研究の和文・欧文の学術論文や解説記事が網羅されており、それだけでも学術的な価値が高い。これからスンクスを実験動物として用いようとしている研究者はもちろんのこと、既にスン



クスを使用している研究者にとっても貴重な参考書となるであろう。

残念な点は、実験動物としてのスンクスを世界的に広め、また実験に使用された動物数としては抜きん出ていると考えられる嘔吐研究について触れられていないことである。スンクスはラットやマウスと異なり嘔吐する能力を有しており、動揺病（乗り物酔い）の感受性が最も高い実験動物である。これらの研究を世界に広めた一人として、成果が本書に記載されていないことを残念に思う。